

# 第2号の刊行に当って

専務取締役 米山 高範



コニカテクニカルレポート第2号が刊行されることになりました。新生コニカのスタートを機に第1号が発刊され、引続き研究技術の成果を重ねて、ここに第2号が刊行されることになったことは大変意義深いことと思います。

少し古い話になりますが、今から10年ほど前、1980年代をむかえるに当って、しきりに企業経営の課題が議論されました。ご存知のように、'70年代は2度にわたる石油ショックや、ドルショックを経て激動の時代であっただけに、新しい'80年代を如何に対応してゆくかが大きな問題でもあったのです。当時、いくつかの調査機関が、かなりの規模の調査をおこなって報告書をまとめました。新しい時代にむけて、企業が如何に対処すべきかの指針を示した訳ですが、その内容は期せずして、「新技術の開発」あるいは「新規商品の開発」を第一に取り上げていたのです。

事実、その後の産業界の動向を見ますと、ぎびしい企業環境とはいえ新技術、新規商品の開発に成功し、新しい需要を創出して業績に貢献した実例が数多くありますし、一方、研究技術の成果をあげ得ずに低迷した企業もあります。

さて、今まさに'90年代に突入しようとする時機に、各企業は社内、社外の難問に直面しています。いずれ、10年前と同じように新しい年代への課題について提言がおこなわれることとは思いますが、その結果を見ずとも、結論は、やはり「新技術、新規商品の開発」の重要性が一層強調されるに違いないと思っています。

さて、このような状況の中で、われわれは如何に対応してゆくべきなのでしょう。勿論、会社の事業目標をよく見すえた上で、適切な研究開発テーマを選択すること、あるいは、そのために適切な経営資源を配置してゆくことが必要なことは論を俟ちません。しかしそれにもまして大切な事は、研究技術者が、企業の実態をよく理解して、意識と行動を革新してゆくことです。

第1号の巻頭言で、井手社長も指摘したように、研究技術者は常に、“高感度”であり、“知的野性”を心がけなければなりません。狭い視野に閉じこもるのではなく、広く他社の成果や国際的な技術レベルに注目し、そして、自分自身を励起させ行動してゆくことではないでしょうか。